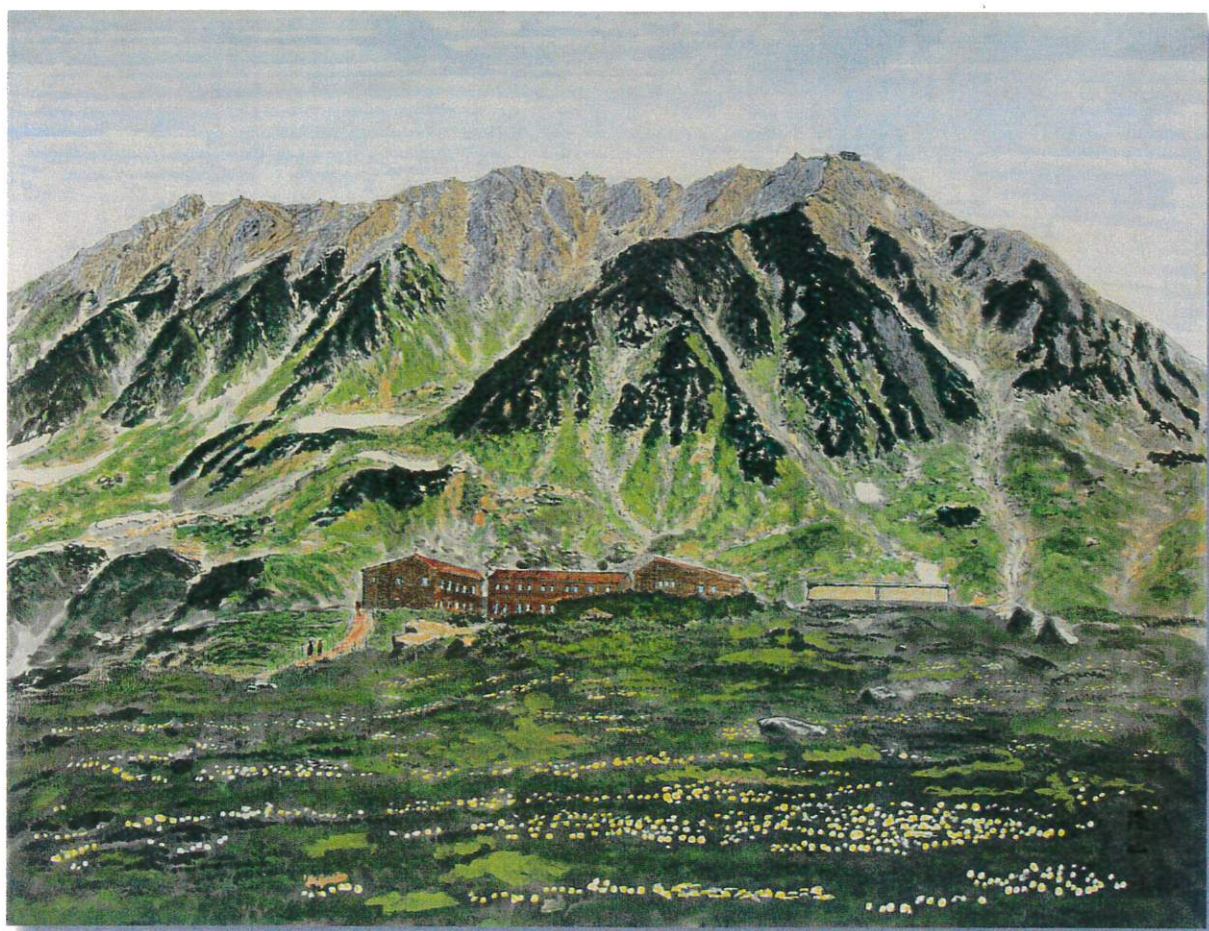


富山県人

2021

令和3年 6月号



「立山 夏」

吉岡 隆山

室堂から見た立山です。夏の盛りといえども涼しく、花が咲きみだれる中に堂々とそびえ立つ、心を打つ眺望です。水墨画に色をのせてみました。

富山県を代表する山を、昭和天皇も「立山の空にそびゆる雄々しさに ならへとぞ思ふ御代の姿も」と詠まれています。

水力発電で水道維持

深松組が故郷笹川で着手

総合建設業の深松組が朝日町笹川で4月26日、小水力発電所建設と簡易水道改良工事の起工式を行った。

同地区では住民が1959年に水道を敷設し、83年に大改修したが既に40年近く経過し、老朽化による破裂が見つかるようになった。改良工事には約3億円がかかるが、この10年で人口が4分の1に激減している集落にとって費用負担は困難で、水道が使えなくなる危機が迫っていた。

現在、仙台市を拠点とする

深松組は、笹川の深松幸太郎氏（1905～1991年）

が水力発電所建設を機に1925年に創業。新潟や関東、東北の土木工事に携わり、1949年仙台に本店を開いた。



左から、深松会長、社長と、地元の竹内寿実自治振興会長

（56）その孫である深松努社長は、北陸支店長である深松隆専務から笹川の水道問題

を聞き、知り合いの高山市で信託事業をしているすみれ地域信託の井上正社長に相談。小水力発電ができる川が朝日町にないかと調査を依頼し、故郷を流れる笹川が十分な水量であることが分かった。

そこで、小水力発電の売電収入で水道建設費を賄うスキームをすみれ信託が考えた。深松組は地元と一緒に建設・管理などに携わっていくが、企業倒産の影響を受けない信託方式を採用することで、地域の水道を確保し続ける。朝日町から水道設備建設工事へ補助を受け、北陸銀行からも低利率の融資協力を得た。

深松社長は3歳まで育った故郷笹川の集落維持に道筋をつけることができ、その事業に携われる喜びをかみしめる。父で会長の勇氏も故郷のために「こんなに嬉しいことはない」と喜ぶ。すみれ地域信託によると「故郷に恩返ししたいという深松社長の高い志を、信託スキームをもって叶えることができた。再生可能エネルギーで地域の価値を

最大化する新たな事例として全国の参考になる」と話す。

工事は6月に着工し、再来年6月から売電を開始。簡易水道工事は2025年3月に完成予定だ。